



医療・介護従事者のための死生学 P8

■巻頭エッセイ

大稔 哲也 藤井 省三

■イベント報告

ジェイムズ・チルドレス教授公開講演会

《医療・介護従事者のための死生学》—実績と企画—

日中国際研究会議「東アジアの死生学へ」

ワークショップ「死別とグリーフに向き合う—

他者へのケアとセルフケア」

東アジア人文学交流の出発

—第1回PESETO人文学学術会議から—

アレクセイ・リドフ博士講演会

アカデミック・ライティング集中コース

他



アレクセイ・リドフ博士講演会 P14

■企画案内

ロバート・ニーメヤー教授講演会

「喪失の体験と意味の再構成—レジリエンス(復元力)に関する最新動向」

国際シンポジウム「非業の死の記憶—追悼儀礼のポリティクス」



日中国際研究会議 P10



イスラームの死生学のために

大稔 哲也（人文社会系研究科准教授 東洋史学/中東社会史）

周回遅れで加わったランナー、というのが本COEプログラムにおける筆者自身の立ち位置についての見立てである。加わった理由は、死生学研究にムスリム(イスラーム教徒)の経験と英知を加味するところにあるかと推察する。旧21世紀COE「死生学の構築」を顧みれば、散発的にイスラーム関連の口頭発表はあったが、全体を貫くような貢献は見られなかったように思う。その折の刊行物を見る限り、イスラームの側からも強く興味を覚えて嘆息するようなテーマが散見されると同時に、事態は現在、完全に次のステージへ移行してしまっただけを痛感せざるを得ない。そこには問題が残る。すなわち、イスラームの死生に関する基本的なスタンスすら参加者に共有されないまま、その次の段階から始めてよいのか。一も二もなく三から始めてよいのか、という問いである。あるいは、旧COEでキリスト教や仏教などの教義や解釈をめぐって語られた事柄や費やされた時間の集積に対応するような、前提となる議論の積み重ねをイスラームに関しても行うべきなのか。

また、そもそも我々はいかなる「イスラームの死生学」(仮称)を構想しうるのであるのか。そして、その現況はどのように位置づけられるのであるのか。敢えて言えば、日本における「イスラームの死生学」は未発のままにあり、相応に考究されては来なかったと思われる。しかし、そのことはムスリム一般が死後に思いを馳せない、死生への関心が薄い、ということを決して意味しない。また歴史的にも現代にも、ムスリムによって関連の書物は著されてきた。それゆえ、ここではただ日本の中東イスラーム研究が、死生学を包摂する研究射程を有するに至らなかった/しようとしなかったと解釈しておきたい。ムスリム社会における陰の部分や死をすくいとった研究は、依然として稀である。私見では、欧米や中東においても、この研究ジャンルは比較的近年に新展開が見られつつある領域であろうと思う。

このような状況下で、筆者は周回遅れの様態と現COEの展開への対応を兼ねて、以下のようなプランを想定している。まず、イスラームの死生学へ向けて基本的な認識を深めるため、小規模の研究集会を幾度か主催したい。「イスラ

ーム地域研究」(人間文化研究機構プログラム)の東京大学拠点グループ2において筆者は「中東社会史班」を主宰してきたが、同班と共催する形で、研究報告と討議をベースとした研究会を開けないかと考えている。

ついで、G-COEの現段階へのアプローチとしては、G-COE関連の諸研究会議への参加や、イスラームの死生学をテーマとするより規模の大きな研究集会の主催が考えられよう。近いところでは、5月31日に行われた聖遺物をめぐるワークショップにおいて、イスラームの視座からコメントを行ったし、9月下旬に行われるトゥールーズ大学との合同研究ワークショップにも参画を予定している。さらに未だ構想段階であるが、来秋に現地エジプトのカイロとアレキサンドリア(大図書館)の2カ所にて、国際研究集会を持つべく計画を練っている。

これらの際、筆者は本COEの組織編成上も極めて少数派であるゆえ、つねにこちら側から飛び出し、往還しつつ視点をめぐらすというスタイルを念頭に置きたい。遊撃し、活性化に貢献できればと念ずるばかりである。また、中東現地と是非直接つなぎたい。それが現地との絆を持つ筆者の利点であり特性と考えられるうえ、現地を介して欧米や他のアジアの研究者と連携することも当然可能である。風呂敷を広げ過ぎぬうちに筆を擱くが、これからの数年間に、予期せぬ邂逅を望んでいる。



マリ共和国/バンジャガラの墓参風景(アマドゥ・H・バー氏の墓)



魯迅の遺言状

藤井 省三（人文社会系研究科教授 中国文学）

晩年の10年を上海で過ごした魯迅(ルーシュン、ろじん、1881～1936)に、「死」というエッセーがある。これは編末に「九月五日」の日付が付されており、1936年9月20日に半月刊誌『中流』に発表された。

魯迅はこの年5月15日に発病して、主治医の日本人医師須藤五百三に連日のように往診を受けていたほか、5月31日にはアメリカ人ジャーナリストのスメドレーや若い友人で作家の茅盾らの強硬な主張によりアメリカ人医師による診察を受け、ヨーロッパ人なら5年前には死んでいたであろうほど重症、と診断を下されていた。病は6月以後も悪化し、4年前の上海事変期を除いて24年間書き続けていた日記も6月6日より30日まで中断したほどで、7月に入ってようやく小康状態に戻った。エッセーで魯迅は以上の経緯を回想しながら、無頓着な自分でもこのたびの大病で死のことを考えるようになり、幾条かからなる遺言状を家族宛に書いてみたという。

一、葬儀のためにいかなる人からも一文も受け取ってはならぬ 　ただし昔からの友人はこの限りでない。／二、大急ぎで納棺し、埋めてしまい、打ち切りとすること。／三、いかなる記念に関することもしてはならない。／四、私のことは忘れて、自分の暮らしを大事にすること 　さもなければ、本当のおバカさんだ。／五、息子が大きくなっても、才能がなければ、ちょっとした仕事を見つけて生きていけばよいので、決して中身の無い文学者や芸術家になってはならぬ。／六、他人があなたのためにしてくれると承知したことを、本気にしてはならぬ。／七、他人の歯や目を傷つけながら、報復に反対して寛容を主張する人、これには決して近づくな。

魯迅は東京留学中の1906年に母危篤の電報が届いたので急いで帰国したところ、すでに伝統的婚礼の用意が整っており、朱安(チュー・アン、しゅあん、1878～1947)と結婚することになる。彼女は纏足(てんそく)をしており字も読めず、結婚式の夜が明けて二階の部屋から降りてきた魯迅の顔には涙の跡が見られ、二日目からは一人で書斎で寝ていたという。

当時魯迅は、満州族王朝の清朝を倒して漢族共和国の建国を目指す民族主義革命運動に参加しており、清朝要人の暗殺を命じられたこともあったとい

う。母の命じる伝統的婚姻を黙って受け入れたのも、親孝行のためであろうか。だが北京女子師範大学の非常勤講師を勤めていた1925年3月に同校の学生で広東人の許広平(1898～1968)とのあいだに文通が始まり、翌年、北京の反動政府の弾圧を避けるための広州転居を経て、二人は27年10月より上海で同棲を始めている。そして二年後には男児周海嬰が生まれていた。

遺言状とは異郷上海に残されんとしていた許広平宛に書かれたものといえよう。それにしても、魯迅はなぜ遺言状を生前に雑誌で公開したのだろうか。7歳の息子を抱えて姦通罪に問われる可能性もある愛人を心配してのことであろうか。国民党独裁政権から弾圧を受け、時には上海の地下共産党からも排撃されるという我が身をめぐる複雑な政治状況に、幼い息子が巻き込まれることを恐れたためであろうか。

それから二カ月後の10月19日、魯迅は持病の喘息発作を起こして急逝する。「老板几下 意外ナ〔こと〕デ夜中カラ又喘息ガハジメマシタ・・・御頼ミ申シマス。電話デ須藤先生ニ頼ンデ下サイ。早速ミテ下サル様ニト」という日本書店の店主内山完造宛の日本語のメモであった。

さて魯迅死後には、孫文未亡人である宋慶齡や毛沢東らを委員とする葬儀委員会が結成され、武装警察が出勤する中で盛大な葬儀が営まれ、日中戦争開戦直後の37年10月には共産党中央が置かれていた延安で逝世一周年の記念集會が開かれ、毛沢東が「魯迅の中国における価値は、わたしの考えでは、中国の第一等の聖人」と講演して魯迅を中国革命の聖人に祭り上げた。また近年では息子の周海嬰が孫の周令飛と共に魯迅文化発展センターを設置したり、「魯迅酒」の商標登録を申請して国家工商総局より「一代の名家の名を商業活動に用いるのはよろしくない」との理由で否決されてもいるという。

魯迅が自らの死に備えて生前公開した遺言状は、ほとんど反故にされたといえよう。かつては政治家による政治的利用のために、そして最近では家族による経済的利用のために。しかし死生学の視点から魯迅の遺言状を読むとしたら、どのように読めることだろうか。魯迅の再読もそこから始まるのかも知れない。

東アジアと西洋の文脈における遺伝子倫理・国際会議

(香港バプティスト大学)

一ノ瀬 正樹 (人文社会系研究科教授 哲学)

去る2007年12月10日から12日に渡る三日間、香港の九龍地区にある香港バプティスト大学(Hong Kong Baptist University)にて「International Conference on Genethics in East Asian and Western Contexts」と題された国際会議が開催され、本「死生学」プロジェクトから、清水哲郎教授と私一ノ瀬の二名が日本代表として参加し、発表をしてきた。この会議は、香港バプティスト大学と英国のオックスフォード大学とが主催したもので、清水教授と私はオックスフォード大学の「Uehiro Centre for Practical Ethics」のジュリアン・サヴレスキュ(Julian Savulescu)教授の紹介を通じてこの国際会議に招かれるに至ったのである。会議は、香港、イギリスからの参加者を軸に、アメリカ合衆国、ドイツ、中国本土、台湾、スウェーデン、タイ、イスラエル、オーストラリア、ニュージーランド、そして日本からの参加者によって構成されていた。表題にたがわぬ陣容であった。

さて、今日「遺伝子倫理」は、「genethics」という呼び方のも一つの領域として定着しつつあり、いわゆる「遺伝子操作」や「優生主義」といった話題を核として、近隣分野である「神経倫理」(neuroethics)との連関のもと、活発な議論が世界的に繰り広げられている。倫理的にどのような問題が想定されうるか、そうした問題にどう立ち向かうべきか、それを生命科学や先端医療技術についての具体的知見に基づいて、リアリスティックに論じてゆくという分野である。今回の会議では、キーノート・スピーカーとして、米国のトリストラム・エンゲルハート名誉教授、そしてサヴレスキュ教授が基調講演を行った。「パーソン論」の提起者として有名なエンゲルハート教授は、今回は、多様な文化そして多様な道徳が交差する現代の状況の中で、どのようにして普遍的な道徳規範を導き出していけるか、という問題を論じ、まさしく本国際会議のような異文化相互の対話を繰り返すことの重要性を力説した。また、サヴレスキュ教授は、遺伝子操作を将来的に、場合によっては強制的に、行っていくことの問題性について、公共の福利という観点から、統計的データを駆使しながら、詳細に論じた。いつものよう

に、一定の制約のもとでの遺伝子操作の実行を推奨する、という方向の論を張った。議論が大いに白熱したことは言うまでもない。

清水教授は、遺伝子倫理の問題を医療倫理の文脈の中に、しかも日本の文化的な背景に特有の視点に立って、位置づけるという試みを本国際会議の場で提言した。すなわち、西洋的な「個人」を軸とする倫理ではなく、「家族」などの濃密な関係性が文化的に厚く染みこんでいる文化的環境のなかで、遺伝子に関わる現代的な問題を捉え返そうという視点を導入したのである。西洋と東洋のはざまを可視化しようとする提言であり、多くの関心を喚起した。また、私自身は、「遺伝子操作に対する不確実な責任」と題して、遺伝子操作の結果の責任を誰がどのように取るのか、という責任をベースにした倫理的語りという主題を、犯罪学的、形而上学的、未来学的な三つの不確実性という視点から提起してみた。多くの鋭い質問を得て、私自身益するところ大であった。

その他、香港のLo Ping-cheung教授や台湾のSun Hsiao-chih教授などが、遺伝子操作の問題を中国の伝統思想、すなわち「漢方医学」や「儒教」の枠組みの中で捉え直してみよう、という今日の中国圏での思想研究の一つのトレンドをなす議論を提示してくれた。こうした提題を聞きながら、私は、西洋由来の新しい倫理や死生の問題を東アジアという枠組みの中で考えてゆく、というスリリングな舞台のこの上のない魅力を深く確信するに至った。視野が大きく広がった三日間であった。





第2回BESETO哲学会議（北京大学）

一ノ瀬 正樹（人文社会系研究科教授 哲学）

去る2007年12月27日と28日の二日間に渡って、中国の北京大学において「第2回BESETO哲学会議」(The Second BESETO Conference of Philosophy)が開催された。BE・SE・TOとは、「Beijing」(北京)、「Seoul」(ソウル)、「Tokyo」(東京)それぞれの頭二つの文字を取って並べたもので、本学においては、北京大学、ソウル国立大学、東京大学の三大学の共同学術活動のことを指す言葉として用いられている。これは三大学全体に渡る大きな学術共同活動だが、そうした全学的企画に先だって哲学系の教員や学生によるBESETOがすでに始まっており、第一回が2007年2月にソウル国立大学にて開催された。それを承け今回、第2回が北京大学にて開催される運びとなった。オーガナイズをされた、北京大学のXianglong Zhang（張祥龍）教授、ソウル国立大学のLee Nam-In（李南麟）教授、そして駒場の村田純一教授、本郷の榊原哲也准教授のご尽力に深く感謝申し上げたい。

このBESETO哲学会議は、今回から哲学一般を広く包含することとした。この「哲学一般」ということの中には、西洋哲学を越えて、儒教、仏教、京都学派などのアジア思想も含まれる。また、現在の世界的現状に照らして、使用言語を「英語」に限定する、というのもこのBESETO哲学会議の特徴である。今回私たち四名は（榊原准教授、今村健一郎氏、朝倉友海氏、そして私一ノ瀬）はグローバルCOE「死生学の展開と組織化」の活動の一環として参加し、研究発表を行った。それ以外に、駒場グローバルCOEから村田教授、信原幸弘准教授ら五名が参加し研究発表を行った。二つのグローバルCOEの連携事業でもあった。

発表内容は多岐にわたったが、死生学の活動の面に触れるならば、まず榊原准教授が、「他者とともに生きる」という他者経験について現象学的な観点から提題を行った。私と汝の呼びかけ合いという西田幾多郎の思想にも触れながら、私たちの「生」を支える根源的な問題を論じた。次に、今村氏がジョン・ロックの刑罰論について提題し、『統治論』では触れられていない「教育としての刑罰」についての議論をロックの『教育論』に沿って洗い出す、という作



業を提示した。「死刑」問題を対極に見据えた発表であった。そして朝倉氏は、新儒家と京都学派との比較研究というテーマで、特に牟宗三と高山岩男とを取り上げ、両学派の道德性の位置づけについての異同を解明した。東アジアの死生観と深く連動する提題であった。最後に私自身は、「自由」の問題について、行為者が自由だったかどうかという問題は、自由か否かという二者択一ではなく、「程度」を許容する問題であるとして、これを「曖昧性」や「確率」と絡めて論じた。2006年に行った死生学シンポジウム「精神医療と触法行為の死生学」を引き継ぐ発表であった。

もちろん、その他の発表も大変に充実していた。全体として、東アジアという文脈が色濃く反映されていて、たとえば、張教授などが、現代正義論の問題に儒教的発想を適用するという、現在の東アジアでの思想研究を象徴するような提題をされていたことが印象に残る。また、韓国の趙恩秀氏が日本人の仏教研究を検討する発表をされていたことも印象深い。今後、東アジアの思想研究者が連携を強めて、互いに切磋琢磨し協調してゆくことは、東アジアの哲学研究にとってだけでなく、世界の哲学の展開にとっても重要な意義を持つと間違いなく言えるだろう。次の、第3回BESETO哲学会議は東京大学の駒場キャンパスにて2009年1月10日と11日の二日間開催される予定である。死生学プロジェクトからの、多くの方々の参加が期待される。

なお、より詳しい報告が以下のURLに掲載されているので、参照してほしい。

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/philosophy/report/beseto2007.html>

生と死をめぐる映画上映会 ドキュメンタリー映画 「ひめゆり」上映会・監督講演会

高橋 都（医学系研究科講師 公衆衛生学・内科学）

“「忘りたいこと」を話してくれてありがとう”

これは、去る2008年1月11日金曜日、東京大学医学部鉄門記念講堂において上映されたドキュメンタリー映画「ひめゆり」のポスターに書かれたコピーである。太平洋戦争の沖縄戦に動員された「ひめゆり学徒隊」の名前は小説・映画・舞台などを通じて広く知られているが、生存者自身の証言がまとめられたのは、意外なことにこの作品が初めてである。学術的な集会が多いCOE事業の中で映画上映会というのは異色の試みだったが、金曜午後5時という時間設定にもかかわらず、当日は10代の高校生から70代の方まで学内外から100名以上の聴衆が集まった。

ドキュメンタリー映画「ひめゆり」は「自分たちの体験をきちんとしたかたちで残したい」という学徒隊生存者たちの依頼で制作され、柴田昌平監督とスタッフが13年間かけて撮りためた22名の証言で構成されている（映画の詳細は公式ホームページ参照 <http://www.himeyuri.info/index.html>）。多くのインタビューは、かつて陸軍病院があった洞窟や、元学徒たちが逃げまどった海岸の岩場など、凄惨を極めたまさにその現場で記録されている。元学徒の中には終戦後初めてその場所を訪れた方もいるが、戦後60年を経てもなお、「あの岩の陰で・・・」「洞窟（ガマ）のこのあたりで・・・」と、当時の状況をつい昨日のこのように語る様子が強く印象に残った。

上映後の対談で柴田監督は、「忘りたいこと」を映画スタッフがどのように記録していったか、その詳細を語ってくださった。撮影にあたっては、証言する元学徒の目の高さにカメラをフラットに置き映像的な演出を極力排したことで、元学徒が話し終えたと思えるまで何時間でも付き合ったこと、現場に立った元学徒に当時の記憶が鮮明に蘇ってきたこと、当初は証言を躊躇していた人が「話せてよかった」と言って他の学徒にも収録を勧めたことなど、実際の制作経緯を聞くことで映画自体や証言内容への理解が一層深まったと思う。会場からの質問も多く、監督はその一つ一つに実に丁寧に答えてくださった。

参加者アンケートには、さまざまな声が寄せられた。「次帰省したら、祖父母に話を聞いてみます」（20代沖縄出身学生）「生と死の分かれ目は何だったのだろう」（20代防衛省に就職予定の学生）



「生の声がいかに力強いものなのか思い知らされた」（30代留学生）「これから更に知っていくための“欲望”を喚起されました」（30代学生）「“生き残された”という言葉から生きる意味を考えさせられた」（40代教職員）「今日のことを周囲に伝えていきたい」（50代教職員）「今生き永らえて、平和のために何かをしなくては」（70代）「今月沖縄行くけど、くじら見てるばあいじゃないかも」（10代）。当日観に来てくれた友人は、「これだけの過酷な体験をした人たちが、その後教師として働いたり、結婚して子どもを育てたりして、戦後50年を生き抜き、今は一見どこにでもいるような普通のおばあさんになってこうして語っていること、そのこと自体に感動した」という感想を寄せてくれた。また、母親と一緒に来た女子高生からは「ひめゆりの方たちは全滅したと学校で教えられましたが、生きていて下さったことがすごく嬉しかったです」というメールが届いた。証言に加えて、元学徒の存在自体が大きなメッセージとなっていることを実感させられた。

上映と対談をあわせて約3時間の集会だったが、途中退席する人はほとんどいなかった。ひとつの映画を媒体にして多くの人が集まり、生と死を真正面から考えた濃厚な時間だったと思う。「“忘りたいこと”を話してくれてありがとう” これは、金曜の晩に映画を観に集った聴衆が元学徒の方々に伝えたい言葉ではないだろうか。

最後に、上映会の準備・運営にご尽力いただいた皆様に篤く御礼申し上げます。

ジェイムズ・チルドレス教授公開講演会

「バイオエシックスの世俗化 - 神話か、現実か？」

島 蘭 進 (本COE拠点リーダー 人文社会系研究科教授 宗教学宗教史学)



ジェイムズ・チルドレス (James Franklin Childress) 教授は、ヴァージニア大学で生命倫理と宗教学を講じ、アメリカのバイオエシックス (生命倫理学) のパイオニアの1人として名高い学者である。1979年に初版が刊行されたトム・ビーチャムとの共著、『生命医学倫理』 (Principles of Biomedical Ethics) はすでに第5版を数え、バイオエシックスの基本図書としての地位を確立している。今もなお、第1線で活発な学術活動を続けるチルドレス教授の来日を機会に、2008年1月13日 (日) バイオエシックスと宗教との関わりをテーマに力のこもった講演と活発な討議が行われた。

この講演でチルドレス教授は、バイオエシックスにおいてやや曖昧なかたちで捉えられている宗教の役割について、アメリカ合衆国におけるこれまでの動向を論じた。教授はまず、1970年前後に始まるアメリカのバイオエシックスの起源とその世俗化に関する定説となっている、二つの異なる物語を検証する。

第1の物語では、バイオエシックスはキリスト教の神学者や宗教的な素養をもった人が中心になって始めたが、その後、次第に宗教色が薄まり、今ではすっかり世俗的な知の様態に転じたとされる。第2の物語はこの第1の物語を批判しながら提示されているもので、もともとバイオエシックスにおける宗教の役割は大きなものではなかったとするものだ。

この二つの物語は、それぞれに重要な真実をとらえているが、どちらもアメリカ合衆国のバイオエシックスの多様性を十分に捉えきれていないとチルドレス教授は論じる。二つの物語はどちらも、

現在のバイオエシックスは世俗化されたものであることを前提にしているが、それは事実と異なる。

宗教はバイオエシックスにおける役割をこれまでも果たしてきており、今もその状況は変わらない。それは、(1) 例えば、バイオエシックスの枠組みを構成する際の、意味や価値の源泉として。また(2) 解決が要請されるようなバイオエシックス上の対立・葛藤が生じる際の争点の源泉としてである。

チルドレス教授は、とくに3つの領域を取り出して、宗教がなお意義深い関与を続けていることを示していく。すなわち、臨床現場で患者の便益を保護し彼らの選択を尊重すること、医療専門家の良心を保護し患者の利益を守ること、多元的な民主主義社会において公共政策を策定するなかで、宗教的信念のための適切な場所を確保することである。ふつう注目されるのはこの領域だが、チルドレス教授がこの領域にも目を配っているのは独自の視点である。

チルドレス教授はアメリカ合衆国のバイオエシックスにおける宗教文化の影響力について、自ら当事者として経験してこられたことを踏まえて、その根強さを強調した。東アジアから見ると宗教のネガティブな影響が目立ちがちであるが、教授はバランスのとれた見解を提示した。そしてその主張の妥当性を検証していくには、グローバルな視点からの討議が必要だと説いた。日本で死生学を立ち上げ、文化や死生観の相違とバイオエシックスの関係について研究を進めている本COEにとって、多くの示唆と力強い激励のメッセージを含んだ講演であった。



《医療・介護従事者のための死生学》 実績と企画

清水 哲郎（次世代人文学開発センター上廣死生学講座教授 哲学・臨床死生学）

冬季セミナー実績

2008年1月12日～14日に、東京大学グローバルCOE冬季セミナー《医療・介護従事者のための死生学》を開催した。これは、死生に関わる臨床現場でケアに従事する方たちが、死生学の論点・理論・方法に関する理解を深め、実践に生きる知を涵養することを支援する講義や演習を行うという趣旨のものである。定員50名として参加者を募集したところ、100名を越える応募があり、このような企画が医療・介護現場でいかに求められているかを今更ながら認識した次第である。医療・介護活動に現に携わっている方々を優先して正規参加者とし、他は聴講生として受容れることとした結果、北海道や北陸など遠方からも、また医療機関で重責を担っている方々も含めて参加していただき（実績は、正規登録者64名、聴講生約40名）、全12コマ中10コマ以上出席した正規登録者51名に修了証を授与した。

人文・社会系の研究成果を提示する「死生学コア/トピック」と、臨床現場にかかわる場面で考える「臨床死生学コア/トピック」から成るカリキュラム（実績は表を参照）を立てたが、受講者には好評で、熱心に参加していただけた。日本における死生学の歴史から、21世紀COEからG-COEへかけての死生学プロジェクトの目指していることまで、仏教の本来の思想の在処から、日本の思想家・文学者たちのことばを題材にした日本人の死生観、また現代思想における死の問題まで、具体的ながん医療・緩和ケアの現場の実情から、自分で経験してはじめて他者の痛みが分かるという言説についての考察や、

病院における死についての社会的アプローチまで、死生学の広い領域のうちいくつかは目を向けていただいた。日頃あまりなじみのない、人文・社会系の研究成果を一般市民向けに提示した講義は、受講者にことに新鮮な印象を与えたようであった。こうした講義は、生き死にが問題となっている患者・利用者とその家族に対するケア活動に際して、ケア相手の死生についての考えをよりよく理解し、また自ら死生について適切な理解をもって事にあたれるようになることに、何らか資するものと考えている。また、講義に加えて、参加者に提供していただいた事例について共同で検討する演習を行ったが、個別の具体的な事例に即して研鑽すると共に、参加者それぞれが臨床経験を通して得ている知恵を出し合い、共有する場ともなった。以上について、より詳しくは、本セミナーの実績報告書を作成しているので、そちらを参照されたい。

冬季セミナー授業実績

【死生学コア】(1コマ) ・死生学とは何か	島園 進
【死生学トピック】(4コマ) ・日本人の死生観 ・現代哲学における「死」の思考 ・仏教における死生観 ・20世紀心理学の死生観	竹内 整一 熊野 純彦 下田 正弘 聖心女子大学 堀江 宗正
【臨床死生学コア】(2コマ) ・臨床死生学とは/ケアにおける死生の理解と価値観/ 臨床倫理/スピリチュアル・ケア	清水 哲郎
【臨床死生学トピック】(3コマ) ・生と死における医療者自身の当事者感覚と診療スタイル	高橋 都
・日本人の死生観とがん治療 ・死と死に行くことの社会学	中川 恵一 山崎 浩司
【臨床死生学演習】(2コマ) ・事例検討	清水・山崎

*所属を示していない講師は、G-COE事業推進担当者

参加者のご感想(アンケートから抜粋)

三日間、いろいろ考え、自分の中にあるモヤモヤしたものが整理できたり、方向性が見える学びが得られました。中でも医療者と当事者感覚というところで、自分の日々の実践の整理が出来たように思います。「知」と「情」のバランスを保ち常に事例を振り返り分析したいと思います。本当に「感情労働の従事者」という表現が今の私そのものです。相手を理解することは難しいですが、関心を持って人と人であることを大事にケアしていきたいと思っています。今まで勉強し得たスキルを自分自身が内面的に培ってきた私らしさをあわせて専門性を高めていきたいです。そのことをあらためて考え、確認する機会となりました。臨床にどっぷり……の毎日にまたパワーをいただくことが出来ました。社会学という視点からのアプローチも新鮮でよかったと思います。また色々な

職種の方のご意見も大変参考になりました。

SWである自分がどのようにアプローチをとり患者さんに関わっていくかということが、少し見えるような気がしました。

死に対する今回のセミナーでしたが、直接緩和ではない病院に働く自分にも、考え方として、うなずける点や勉強になる点が沢山ありました。日々の業務の多忙さを理由に見て見ぬふりをする自分にも葛藤していました。その葛藤は持ち続けていいものだし、完全というものはなくていいんだと思います。明日からのモチベーションが上がりました。仕事に還元できたらと思います。

現場の医師（の多く）は肉体的労働者なので、日々の自分の行為の有り様について“なぜ”とか“どうして”とか、殆ど考えていません。行動の基準は単純化してしまえば“病気を治す/患者の状態を今より良くするのに必

基礎コースの開設 / 本年度の活動予定

《医療・介護従事者のための死生学》セミナーは、今年度以降も継続して行い、より充実したものにしていきたいと考えている。そこで、年に何回が行われるセミナーに継続的に参加することによって、ある程度まとまった知識を得、かつ実践に生きる知を涵養するべく、医療・介護従事者のための死生学・基礎コースを設定した。これは24コマ分の授業に参加し、かつその研鑽の成果を反映するようなレポートを提出することからなる。参加者は、まず初心者向けセミナーに参加した上で、年何回が行われる、リピーター向けのセミナーに、それぞれのペースに合わせて参加するという仕方、研鑽を深めることになる。

セミナーの今年度開催予定は次の通り。

・初心者向け

夏季セミナー

2008年 7月19日(土)～20日(日) (8コマ分)



・リピーター向け

秋季セミナー

2008年10月18日(土)

テーマは周産期医療・ケアの予定(4コマ分)

冬季セミナー

2009年 1月31日(土)

テーマは難病・高齢者のケアの予定(4コマ分)

また、以上の基礎コースに加えて、臨床死生学と交叉する領域である臨床倫理学に特化した、臨床現場の個別事例検討のスキルアップのための研修会を企画している。これは全国各地の医療従事者と連携し、交流しつつ行われるもので、本年度は2～4回開催予定である。

*以上の企画について、より詳しい情報は本G-COEのウェブページに随時掲載される。



要か？”それだけ。

しかも職性上、即断即決です。50年後どころか明日まで待つのも無理、今すぐ何とかして……という場面の連続ですので医師が何かとすぐ結論を求め、すぐ何か具体的に役立てようとする姿勢は、人文学領域の方からは異星人に見えるかもしれません(逆もまた然りですが)。

ですが、今、医師が“大切なことだが、暇が無いのでそのうち考えよう/取り組もう”と先延ばしにしていた多くの問題が、どーっと医師の身に降りかかっています。死生学も大切な問題の一つだと思います。どうか人文学系の先生方、「現場を知らないくせに」とか「それが何の役に立つんだ」という医師の二枚切り札にひるまず、ご研究を深めてください。そしてそれを医療現場に向けて発信してください。医療現場の側からももっともっと問いかけたい、情報を、知識を得たいと思います。直ちに「現場で役立つ」ということが至上命題だとは思っていませんが、双方向のやりとりが活発になり、双方

の「……のくせに」という思い込み、決め付けを乗り越えて行ければそれは結局“現場で役に立つ”ことになるのだと思います(医師の側からの視点で恐縮です)。

続々とお話を伺ったので今では頭の中がゴチャゴチャしていますが“そのうち……”にせず明日からセミナーの内容が自分のものになるよう学び続けて行きます。

医療従事者でありながら、学生のときも、薬剤師になってからも「生と死」に関してこれだけ深く考えることが無かったのだとでも勉強になりました。

薬剤師という職業は、日本では「死」に直面することも考える機会もほとんどありません。遺体を見ることも無いということもあります。人体模型でさえ「気持ち悪いから置かないでくれ」というくらいです。それゆえか未だに医療チームに加わる人が多くありません。これからの時代、薬学部学生にも死生学を学ぶ機会があればと強く願います。



日中国際研究会議「東アジアの死生学へ」

竹内 整一（人文社会系研究科教授 倫理学）

日中国際研究会議「東アジアの死生学へ」は、2008年2月18、19日の両日、北京の「趙家楼飯店」会議室において、G-COE「死生学の展開と組織化」と中華日本哲学会との共催で行われた。日本側からは20名、中国側からは約50名の参加者があった。

まず中華日本哲学会の卜崇道会長の歓迎の挨拶を受けて、竹内が今回の研究会議は、これまであまり主題的には問われてこなかった「東アジアの死生学」の、とりわけ日本と中国との「死生学」をそれ自体として考察対象とすることにおいて、そこにあるであろうさまざまな可能性や問題性を見すえ、そこからあらたな「死生学の展開と組織化」への発信を試みようとするものであるとの主旨説明がなされた。

18日午前の研究発表は、まず法学研究科の石川公彌子氏が、近代日本人の死生観として、柳田國男、折口信夫らの思想を取り上げ、その中核には人間の死後の魂の行方の問題があり、そのあり方は生の日常倫理のあり方とむすびつけて考えられていたと論じ、続いて、江西師範大の鄭曉江氏が、中国儒家の「楽天知命」「安之若命」という概念を取り上げ、生死という関門に向かい合ったとき、死後への関心と普遍的宗教信仰の欠如した中国人の多くはただ“命”という観念に頼るだけであり、しかしまたそうした点で伝統的儒家の智慧は大きな現実的応用価値を具えていると論じた。また、浜松医科大学の森下直貴氏は、現代日本人の「死生感」に注目し、そこに伝統的感覚・近代的感覚・現代的感覚の混在の背後に、その元となるような形なき<もの>たちのリアリティの世界が潜んでいることを指摘し、そこからのあらたな死生学の可能性を示唆して午前の会議を終えた。

午後の研究発表は、まず杭州師範大の朱曉鵬氏が、道家の思想を取り上げ、道家は伝統的につねに「生を重んじ身を貴び」、「身を全うし真を保つ」ことを主張し、そうした生命中心主義を損なう権力・金銭・地位等の疎外に反対してきたとして、その現代的意義を強調した。続いて、本研究科の末木文美士氏が、日本の仏教寺院は近代社会の中で死者儀礼と墓地の管理を主たる任務とし、「葬式仏教」と軽蔑的にいわれてきたが、生者が今日あるのは、死者の築いてきた歴史によるのであり、死者の問題を無視することはできない。その観点

から、死者との関わりを重視してきた日本の仏教の思想の可能性を考えてみる必要があると説き、同種の問題を受けるかたちで中国社会科学院哲学研究所の張志強氏は、中国での儒教・仏教の近代的再構築のあり方を論じ、その考察には、近代国家へと転換する精神的要件とされた、清末における「志士」の精神革命の生死観・道徳観の思想構造に分析を加え、その近・現代的意味の得失を検討すべきであると論じた。

午後の後半では、まず大阪大の中岡成文氏が、老いを含めた死生の問題を考えるには「弱さ」の承認が前提であり、自分の体力・精神力の衰えに向き合うことを通じ、「弱さ」が人間の本質を規定していることに気づく必要がある、またそれは自分の覚悟だけでは対処できず、他者との媒介を受け入れることが求められると、臨床哲学の立場から提言した。そして個別発表の最後として中国人民大学の李萍氏は、中国は伝統的に身分に応じたの死亡観に厳然とした違いがあったが、80年代から始まった現代化プロセスにおいて、個人の職業選択が相対的な自由を獲得するようになると、そこにさらなる多様化の傾向が現れてきたと報告した。

19日の総括発表では、本研究科の池澤優氏が、西洋発の生命倫理の内的論理を分析し、漠たる感覚を、誰が・何を・どのような論理で生命倫理へと「言語化」するのかという点に着目して、それを踏まえ、いかにして儒教的生命倫理が構築するのかを提題をした。また、中共中央党学校の靳鳳林氏は、中国死亡哲学の根本的目標を明確にし、死亡哲学の学術モデルを確立し、国内外の死亡哲学の比較研究の理論レベルを高めることが今後の中国死亡哲学の基本的発展方向となると訴えた。

共産化・文革化以降、とりわけ都市市民を中心に崩れてしまった伝統的死生観や死者儀式の空洞化を、いかに埋めるかが当面の中国の死亡学の大きな課題であるという中国側の研究発表に対して、経緯は異なるものの、やはり同じような空洞化をかかえる近現代の日本において、いかにあらたな死生学の構築や展開が可能かが問われ、議論はその点を中心に交わされた。いずれ近日中に、日中両語の報告論集が出版されることになっている。

ワークショップ「死別とグリーフに向き合う

他者へのケアとセルフケア」

山崎 浩司（人文社会系研究科上廣死生学講座特任講師 死生学・医療社会学）

2008年2月22日、山上会館大会議室にて、午前9:30から午後4:30まで、「死別とグリーフに向き合う他者へのケアとセルフケア」と題したワークショップが開催された。講師にマウント・アイダ大学全米死の教育センター長であるキャロル・ウォグリン教授をお招きし、死別とそれに伴う悲嘆中心の反応全般である「グリーフ」について、詳しくお話しいただいた。

この催しは、上越教育大学の得丸定子教授（いのち教育）の招聘により来日したウォグリン教授の講演ツアーの一環であり、上越教育大学、山口大学、京都大学を経て、その最後を飾るものであった。本ワークショップは、G-COE「死生学」主催、グリーフ・カウンセリング・センター（GCC）共催で催された。当日、会場は150名程の参加者で埋まり、人びとの死別とグリーフにまつわる問題への関心の高さが窺えた。

「死生学」拠点リーダーの島蘭進教授による開会の挨拶に続き、ワークショップの第1部「死別とグリーフについて学ぶ 実態に即した正しい理解に向けて」が始まった。ここでウォグリン教授は、ご自身のこれまでのグリーフ研究と25年以上の臨床経験をもとに、死別とグリーフにまつわる基礎概念の確認をされた。核となるのは、「意味の再構成」と「死別に対応するための二元的プロセスモデル」の2つである。

ウォグリン教授によれば、グリーフとは、「あるものに対して自分が抱いていた愛着が断ち切られてしまうこと、またそうして変わってしまった自分の世界に向き合うこと」である。死別体験は、こうした断絶とそれによる世界の一変を伴うが、この変わってしまった世界に対する意味づけを直すこと、人生物語を書きなおすことが、意味の再構成という概念の根幹である。しかしこの人生・生活再編の過程への移行は、まずは喪失を乗り越え、それから取り組むといった段階的なものではない。むしろ、死別者は喪失中心のプロセスと生活再編中心のプロセスとの間を揺れ動き、少しずつ後者に重点がシフトしてゆくものである。これが、死別に対応するための二元的モデルの概念である。

第2部「グリーフの複雑化 ハイ・グリーフの予測と早期介入」では、先の二元的モデルで、喪失中心のプロセスから生活再編中心のプロセスへ、長期にわたって移行できなくなる複雑化したグリーフについて議論された。特に、複雑化したグリーフをうつ病やPTSD（心的外傷後ストレス障害）と峻別する重要性をウォグリン教授は指摘した。複雑化したグリーフは喪失対象に、うつ病は自分自身に、PTSDは安全性に

対する脅威に、それぞれ執着の焦点があるため、ケア提供者は各々について適切に介入・支援のポイントを変えねばならない。

最後の第3部「グリーフ介入と支援者のバーンアウト（燃え尽き）について」では、主にグリーフと向き合う死別者の支援者が直面するバーンアウトと共感疲労が取り上げられ、それらへの対処法も示唆された。バーンアウトとは、「感情的負担の大きい状況に長期間巻き込まれることで引き起こされる、身体的、感情的、精神的疲労」をいう。また、共感疲労は、「トラウマ体験などで苦しむ人びとを助けたり、助けたいと欲することで生じるストレス」と定義される。ウォグリン教授によれば、これらの軽減には、職場における支援的な環境の整備と、仕事とプライベートとの境界を明確にし、それを曖昧にしないことが重要であるとのことであった。

閉会の挨拶でGCCの鈴木剛子代表がいわれたように、ウォグリン教授による明確な概念定義と豊富な臨床事例の提示により、ワークショップ参加者の死別とグリーフ及びそのケアに対する理解は大いに深まった。参加者の議論やアンケートから、彼らの満足度の高さが窺えた。1つ印象的であったのは、グリーフケアに携わる参加者が多かったためか、支援者のセルフケアに対する関心が高かったことである。今後のグリーフ関連の会合でも、このテーマについて引き続き議論してゆく必要性を感じた。

最後に、ワークショップの運営に八面六臂の活躍をしてくださったGCCのボランティアと本学の学生たちに、この場を借りて心より御礼申し上げる次第である。



東アジア人文学交流の出発

第1回PESETO人文学学術会議から

下田 正弘（人文社会系研究科教授 インド哲学仏教学）

ある特定の国や地域や民族に固有の歴史、文化を研究の対象とする学問においては、研究の内容じたいが生き抜かれた事実にたいする評価とも映ってしまうため、主題が現代に深くかかわる場合、客観的な立場からの自由な意見交換は、それだけ困難になる。地理的には東シナ海を囲んでひとつにつながる日本、韓国、中国において、相互を隔てる見えない壁が出現し、公の場における交流が実現しにくかった戦後の60年という歳月は、人文学にとっては避けることのできない、ある沈黙の時期だったのだろう。

前世代からの研究の「継承」を前提としてはじめて「発展」が望みうる学問の世界において、研究方法、調査資料、分析結果、いずれにも厚みのある過去の蓄積を一挙に研究領野から排除してしまうことなど、ふつうなら考えない。けれども、戦後、中国においても、韓国においても、人文の諸学は日本の影響を排除することから始まらざるをえなかった。嵐が吹き荒れたのはたしかにある一時期ではあっても、その爪あととは後にまで残され、気がつけば日本も韓国も中国も、たがいに直接に向きあう機会を得ないまま、欧米の学問を介し、その評価軸を共有しながら人文学を進める環境をつくりあげてしまった。

この事態はもちろん、身近で起きた不幸な過去の歴史にのみ起因するのではなく、異なる伝統として自立していた東アジアの人文学が、それぞれ西洋の文明に曝され、その方法から表現までを一律に再考させられ、その結果、自画像までが変容を蒙らざるをえなかったという、根深い近代とポスト近代の問題につながっている。三大学の人文学がたがいに照らしあう機会を得ることは、むしろこの問題に向きあうためにこそ、いっそう喫緊な課題に思っていた。

* * *

ソウル大学人文大学校長・李泰鎮教授の呼びかけに応じて、北京（PE）、ソウル（SE）、東京（TO）の三大学・人文学の分野において、部局単位の公の学術交流が、2008年3月27日から30日まで、ソウル大学人文大学校において実現する運びとなった。東京と北京からの客人たちを万端の準備をもって殊遇された李学長は、この会議をもって「200年間の東アジアにおける学術の歴史に新しい里程標を立てる」時であると、感慨深く開会の辞を述べられた。

東大からは、立花政夫研究科長、丸井浩副研究科長

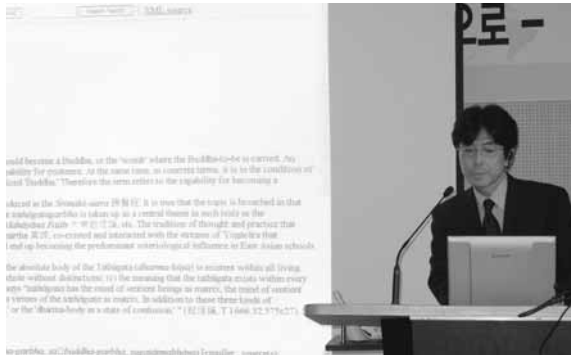
（当時）吉田光男教授（当時）六反田豊准教授、発表者として塚本昌則准教授（「フランス近代文学と私 ポール・ヴァレリーをめぐって」）下田正弘（「仏教聖典コーパスの出現と仏教世界の出現 媒体の展開からみた仏教史」）対論者として高橋和久教授（ソウル大学・金聖坤教授「東アジアにおける英文学研究 韓国の大学における英文科の場合」へのコメント）吉澤誠一郎准教授（北京大学・張学智教授「利瑪竇の「天主」概念に対する中西融合の解釈」へのコメント）小島毅准教授（北京大学・鄧小南教授「中・日・韓学界における中国古代政治史研究の概観 宋代政治史を例に」へのコメント）林徹教授（ソウル大学・金周源教授「アルタイ言語のデジタルアーカイブ構築」へのコメント）さらに死生学プロジェクトの教員代表として、佐藤健二教授、池澤優准教授が、研究員、院生として土屋太祐特任研究員、金京南（大学院博士課程）が参加した。

* * *

「東アジア人文学研究の現況と発展の趨勢」というテーマで召集された会議は、ホスト校であるソウル大学人文大学校の手厚い歓待のもと、成功裏に終わった。東アジアを代表する三大学の人文学交流の出発という、歴史的画期を今世紀の初頭に記しえた偉業を描いても、危機的な環境のなかでいかに人文学の将来の方向を開いてゆくかという危機意識において、すくなくともソウルと東京とは同一の意識に立っていることが十分に理解しえたこと、くわえて、死生学というあらたなテーマを今後の三大学交流において活かしてゆく方向を確認できたこと、これらの二点は具体的な収穫として記しておく必要がある。

大学、社会において人文学離れが急速に進むなか、





危機感を強めたソウル大学人文大学校は、2007年度から「人文学最高指導者課程」を設け、コミュニティサービスに依拠した生涯教育として、政治、経済、経営、社会の分野における指導者やCEOにむけて、人文学的な素養と省察の機会を提供するプログラムを開始した。参加者たちからは、よりよい社会をつくり生活を豊かにするために、人文学的素養がいかに切実なものかを悟ったと熱烈な反応を得ている。「これからの韓国の大学において人文学は不断に象牙の塔を脱し外に出て、境界を越えて他の学問や社会の現実とも緊密に交流し、エドワード・サイードのいうsecular criticismの役割をする」と提題者のひとりと言う。同様の問題をかかえる東大の人文学においても、この試みにはなんらか学ぶべきものがあるだろう。

一方、最終日に設けられた死生学の準備会合では、北京大、ソウル大からそれぞれ代表者2名が出席をし、東大の死生学チームと合流して、新たな学問の将来について意見を交換した。死生学COEのこれまでの経緯と今後の展望の説明を東大側から受けた北京大とソウル大は、人文学の領域においては死生学がかかわる問題への潜在的関心は高く、とくに東アジアにおける死生の問題を独立したテーマとする意義は大きいと応答した。今後連携を密にしなが、次回のPESETO会議で課題のひとつとして取りあげてゆく方向を確認し、会を終えた。

* * *

課題もちろん厳然として存在する。地理的には至近距離にありながら、言語が異なるため、三箇国語の通訳を準備して全体の会を進行しなければならないという不便さは、この三国間に存する問題をもっとも分かりやすいかたちで象徴するものであろう。国境を越

えて会話に自然に花が咲くのは、今回の場合、英語、フランス語を媒介とする研究者どうしとなってしまったことは、いたしかたない。

じつは、こうした雑談の場を覗いてみれば、第一回のこの会合が、周到に準備されたものであったことが分かる。北京、ソウル、東京から集った研究者の専門は、英文、仏文、中国古代、あるいは中世、アルタイ言語、仏教という領域であり、東アジアの現代に重なる領域は、わずかに仏教しかない。つまり研究者たちは、冒頭に述べた「自画像」の問題に直接的なことばで触れあうことなく、独立した学問を媒介として会話が成立するように図られていたのである。この慎重さは、まずは評価されるべきであろう。

もちろん、課題は持ち越されたままである。じっさい、仏教の発表のみは、内容はニュートラルである(と本人は思っている)にもかかわらず、歴史問題に討論の場で曝されることになった。ただ、参加した研究者たちが、それぞれ自国の歴史からは独立した人文学に携わっているものたちであるためであろう、対論者のやや切り口上の熱意に比して聴衆の反応は不思議にも冷静であり、繊細な問題への回答をみごとに聞き分けてくれた安心感があつた。総体的に第一回のプログラム選定は成功だったように思う。

第二回の学術大会が二年後の北京において、第三回が四年後の東京において開かれる。ソウル大学のあまりに見事な歓待ぶりに触れるにつけ、東大文学部関係者は将来のわが身を思い、肝を冷やしていた。

公式の交流がはじまったからこそ、それを継承してゆくためには、日常のやりとりに、これまで以上の配慮が必要になってくる。将来の世代がわずかでも歩きやすい道を開いてゆくこと、それはつねに前世代の役割であろう。



立花政夫研究科長(左)とソウル大学校人文大学学長李泰鎮先生(中央)、北京大学 社会科学部 部長 程郁綴先生(右)



アレクセイ・リドフ博士講演会

伊藤 拓真（人文社会系研究科博士課程 美術史学）

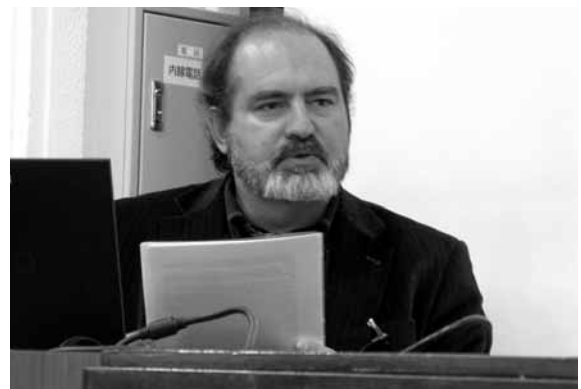
去る2008年4月19日、東京大学本郷キャンパス法文2号館2番大教室において、アレクセイ・リドフ博士による講演が開催された（東京大学人文社会系研究科G-COE『死生学の展開と組織化』主催、同美術史学研究室共催）。リドフ博士は、岡山大学を受入機関として、日本学術振興会外国人招聘研究者事業（短期）により招聘され、同大学の鐸木道剛先生のご配慮により、東京でも講演をしていただく運びとなったものである。東方キリスト教文化研究所（モスクワ）の所長を務めるリドフ博士は、本講演の中心的論題となった「イメージ・パラダイム」のほか、「ヒエロトピア」などの諸概念を提唱し、ビザンティン美術や中世ロシア美術などの研究の新たな可能性を追求する研究者である。

講演は『キリストの聖なる像、聖なる手紙と聖なる門：キリスト教文化におけるイメージ・パラダイム (Holy Face, Holy Script, Holy Gate: An 'Image-Paradigm' of Christian Culture)』という題名のもと、逐次通訳を伴い英語で行われた。その議論はまずエデッサ（現在のトルコ南東部）に由来する二つの聖遺物の由来を解説することから始まった。このうちの一つ、「マンディリオン」はキリストの顔が奇跡的な力でもって写し取られた布であり、もう一つはキリスト自身の手になる書簡である。両者はともにエデッサの街の城門の傍らに設置され、都市の守護としての機能を果たした。この過程で二つの聖遺物は街の城門という場に結び付けられ、単独の聖遺物の枠を超えた聖なる空間を形作るようになる。

マンディリオンと聖書簡の二つの聖遺物は後にビザンツ帝国の首都コンスタンティノポリスに移されるが、その崇敬に衰えるところはなく、絵画をはじめ多くの美術作品に表された。そのようなイメージにおいてもまた「都市の城門」という空間が重要な役割を果たす。この重要性を確認するため、写本装飾やキリスト教徒が日常的に身につけていた工芸品といった諸作品の分析がなされた。そして、これらの作例において重要なのは、個々の聖遺物というよりも、マンディリオン、聖書簡、そしてエデッサの城門という要素が融合した複合体であることが示された。

このようなイメージや概念の複合体を説明するため、リドフ氏は「イメージ・パラダイム」という方法論を提唱する。イメージ・パラダイムとは特別な種類の知覚とも言えるもので、ここでは美術的なもの、宗教的なもの、理知的なものと同様に分類されるような様々な要素が、相互に絡み合い分離することのできない一つの全体を形成している。この全体を研究することの重要性が強調された。イメージ・パラダイムは未だ生まれただけの方法論であるが、その有効性はビザンティン美術やさらには人文社会系の学問全般にも及ぶと博士は付言した。

講演後の質疑応答では、ビザンティン美術の研究者に限らず、多くの分野の専門家が参加して活発な議論が行われた。とりわけ博士が提唱するイメージ・パラダイムに関しては発言が集中した。いくつかの例をあげれば、イメージ・パラダイムとパノフスキー的なイコノロジー（図像解釈学）との相違点に関するより詳しい説明を求めるもの、アメリカを中心に起こったニュー・アート・ヒストリーとの関連を質問するものなどである。このような議論の過程で、リドフ博士は現代美術におけるインスタレーションや今回の来日で訪れた伊勢神宮における式年遷宮などの例をあげ、イメージ・パラダイムの適応例がビザンティン美術に留まらず、より普遍的な有効性をもつ方法論であることを強調した。質疑応答の最後には、博士の提唱するもう一つの新概念であるヒエロトピアに関する説明も行われ、従来の人文社会系の学問の枠組みに収まらない、美術史や人類学、宗教学も取り入れた新しい学問形態への発展の可能性が提唱された。



アカデミック・ライティングのワークショップに参加して

早川 正祐（人文社会系研究科 博士課程）

海外の文献をもとに研究し論文を日本語で書いても、けっきょく自分が依拠している海外の研究者からは何のフィードバックも得られない。それではなにか物足りない 漠然とではあるが、私はそのように感じていた。そして、マイアミ大学大学院での海外研修を経験し、その思いはいつそう強くなった。私は、その研修を通じて、自らの研究成果を海外にも発信することが研究内容を充実させるための最善の方法であると実感した。だが、いざ海外に発信するとなると言葉の壁が立ち上がる。そしてその壁をどう超えていいのかもわからない。そういった状況にあった私にとって、国際学術誌への投稿を目標とするアカデミック・ライティングのワークショップはたいへん魅力的なものであった。

ワークショップは、三月三日から八日までの六日間にわたってグローバルCOE「死生学の展開と組織化」の主催のもとで行われた。毎日ほぼ六時間、英語漬けの六日間であった。

担当してくださったトマス・マークス先生は、ウェスタン・ミシガン大学で英語を母国語としない学生に長年ライティングを教えているベテラン教師である。ワークショップでは、英語で学術論文を書く上で重要になる様々な事柄に関して、実地の訓練を通して学んでいった。だがその中でも参加者が徹底的に叩き込まれたのは、“Simple, cut, tighten!!”（「明快な文にしる、無駄なところははずれ、ただだらとした文にするな」）ということである。マークス先生は参加者の論文原稿を検討している最中に幾度となくその言葉を繰り返した。長く締まりのない文に出会うたびにである。

正直に言うと、私は当初、simple, cut, tightenのスタイルが自分の専門分野である哲学の論文に適用できるのかどうか疑問に感じていた。哲学的な探求自体が一筋縄でいかないものである以上、



当然それを表現する文章は複雑でわかりにくいものになるはずだと決めこんでい

たのである。しかし、このような私の思い込みが的外れであるということに気づくのに、

そう時間はかからなかった。私は読者に分かってもらいたくて、いろいろな修飾句をひとつの文に盛り込むくせがある。その結果、文章はだらだらと続き、明晰さと力強さが損なわれていたのだ。このような文章は読み手をうんざりさせ、理解を妨げるだけである。私が論文で書いた長たらしい文の数々は、マークス先生の手にかかると瞬く間に、ストレートで力強い文へと変貌をとげる。もちろん、あくまでも私のアイデアをきちんと踏まえた上で、表現は訂正されていった。内容は損なわれることなく、いやそれどころか、その内容がインパクトと明晰さをもって読者に伝わるような表現へと変換されたのである。その手さばきの見事さには感動さえ覚えた。

とはいえ、ひとたびマークス先生の手を離れて、自分ひとりで、simple, cut, tightenのスタイルに従って英文を組み立て直そうとすると、それは容易ではなかった。しかし今や、そういった不明瞭な表現のままアイデアを放置することは、知的な怠慢にさえ感じられる。というのも、表現を力強く明晰なものにしていく過程で、自分のアイデアにどのような飛躍や欠陥があるのか、どの部分がきちんと掘り下げられていないのかといった、内容の不十分さまでもが明らかになっていくからである。simple, cut, tightenの精神は、読み手のためだけではなく、自分の思考を鍛え上げるためにも、きわめて重要なものに思えるようになった。

結果的には、英語で学術論文を書くことの難しさを再認識することになったが、実地の訓練を受けることで、具体的にどのようなことに注意をして文章を組み立てるべきなのかに関しては大いに自信をつけることができた。これは大きな進歩であったと思う。辛抱強く熱心に指導して下さったマークス先生、またこのような貴重な機会を与えてくださった島園先生をはじめとする諸先生方には深く感謝いたします。





死生学研究会報告

第20回 2008年1月24日(木) 加藤 大基 (本COE研究拠点形成特任研究員 放射線治療)

第20回死生学研究会は、「医師ががんを告知されて」と題して、自身のがん罹患体験をもとに、「がん患者の死生観」について話をさせていただきました。現在、日本人の約2人に1人が、がんになり、約3人に1人が、がんで亡くなる。がんは、現代日本において最も死を連想させる疾患といっても過言ではない。健常人と比して、より強く死を意識しているであろうがん患者の死生観について、当グローバルCOE活動の一環として、東大病院放射線科治療部外来受診患者さんを対象としたアンケート調査を開始した時期でもあり、その報告も兼ねた発表とした。



自身のケースをもとに、診断の過程・治療法の選択など、がん治療の基本的な考え方およびそれを受けるがん患者の心理状況を説明した。また、手術、抗癌剤と並ぶがん治療の三本柱の1つである放射線治療の適応とその現状や、緩和ケアの遅れ(医療用麻薬の使用量の少なさなど)をはじめ、日本のがん治療の問題点についても言及した。

自身ががん患者となってみての心理、死を身近に感じることによる生のあり方についてなど、がん患者としての心理についても触れた。多くのがん患者と接してきて、また自身ががん患者となってみて感じているのは、人生の残された時間があまり長くないことを知ったとき、人は自分が生きた証を何らかの形でこの世に残すことを欲しているのではないかということである。しかし、がん患者に共通の死生観があるのか否か、あるとすればどのようなものであるのかは、現在進行中の上記アンケートの結果を待たねばならない。研究会後の懇親会でも、死生観の枠に留まらないフランクで活発な議論が繰り広げられた。

第21回 2008年3月12日(水) 福間 聡 (本COE研究拠点形成特任研究員 社会哲学)

第21回死生学研究会は、第一報告で福間聡研究員による「社会正義と善き生死」、第二報告で鈴木健太研究員による「インド仏教僧団におけるケアの指針」の二報告がなされた。



福間報告は、社会正義は我々に健康(良き生)をもたらすという近年の社会疫学研究に依拠して、ではさらに社会正義は善き死をも我々にもたらすのか否かを問うものであった。福間研究員の主張は、J.ロールズの正義の二原理は健康の社会的決定要因の望ましい分配原理であり、かつソーシャル・キャピタルをより豊かにする原理であるため、ロールズ的な社会正義を実現することは我々の生にとって善い。そしてさらに、我々が「死」として考えている対象は死そのもの、あるいは死後ではなく、「生の終末(臨終)」であるため、社会正義の実現は我々の死にとっても善いというものであった。

鈴木報告は、インド仏教僧団における患者ケアのあり方に関する報告がなされた。報告では、インド仏教の古典的文献解釈の中から、インド僧侶集団内で共有されていた、患者に対するケア指針のあり方が示された。また同時に、インド現在の医療のあり方に関して示唆に富んだ問題提起がなされた。



ロバート・ニーマヤー教授講演会「喪失の体験と意味の再構成 レジリアンス（復元力）に関する最新動向」のお知らせ

山崎 浩司（人文社会系研究科上廣死生学講座特任講師 死生学・医療社会学）

本年2月に開催したキャロル・ウォグリン教授によるワークショップに引き続き、今秋9月にも死別（ビリーブメント）とグリーフ（悲嘆）に関する催しを開きます。今回は、「意味の再構成」理論などで大変著名なロバート・ニーマヤー教授をお招きし、「喪失の体験と意味の再構成 レジリアンス（復元力）に関する最新動向」と題してご講演いただきます。喪失・死別・グリーフを中心とした死生学の問題に関心のある市民、専門家、研究者、学生、葬祭関係者などのご参加をお待ちしております。奮ってお申込みください。

この講演会は《医療・介護従事者のための死生学》基礎コースの単位（「臨床死生学トピック」1コマ分）として認定されます。

1. 講師 ロバート・ニーマヤー教授（米国メンフィス大学心理学部教授）
2. 題目 喪失の体験と意味の再構成 レジリアンス（復元力）に関する最新動向
逐次通訳があります
3. 日時 2008年9月3日（水） 10：00～12：00
10：00～10：05 開会の挨拶（本COE拠点リーダー 島蘭進教授）
10：05～11：35 講演
11：35～11：55 質疑応答
11：55～12：00 閉会の挨拶（グリーフ・カウンセリング・センター代表 鈴木剛子氏）
4. 会場 東京大学 本郷キャンパス 法文2号館2階1番大教室
5. 入場 無料（途中退場可）
6. 定員 150名
7. 申込
8月27日（水）までに、東京大学グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」ホームページ（<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/ja/yotei/k080903.htm>）からお申し込みください。お名前、ご所属／ご職業、メールアドレスを入力してください。（なお、ホームページからの申し込みが不可能な場合のみ、以下の問い合わせ用メールアドレスまで、必要事項をご記入のうえ、お申し込みください）
8. 問合せ
メール（griefworkshop@gmail.com）または電話・FAX（03-5841-3736）
9. 主催 東京大学グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」
10. 共催 グリーフ・カウンセリング・センター
東京大学人文社会系研究科次世代人文学開発センター上廣死生学講座
東京大学死生学研究連携ユニット



国際シンポジウム「非業の死の記憶

追悼儀礼のポリティクス」のお知らせ

池澤 優（人文社会系研究科准教授 宗教学宗教史学）

21世紀COEの段階から、本プログラムは我々にとって死者の存在が何であるのかを問う研究集会の開催を一つの柱としてきた。2004年度の「死者と生者の共同性」、2005年度の「死とその向こう側」、2006年度の「死とその向こう側」などの国際シンポジウムがそれである。特に2回にわたる「死とその向こう側」は、フランス極東学院との共催により、東京とツールーズで開催されたものである。

今回のシンポジウムはその延長線上で計画されたもので、戦争や災害による不慮の死をテーマとする。死者と生者の関係性を問う場合、この問題は避けて通れない。もとより今までの一連のシンポジウムでもこの問題は何度も論じら

れたが、今回、主題化することを目指しているのは、非業の死をとげた死者の記憶がどのように構築され、継承されているかという点である。それら死者の記憶は共同体の現在のあるべき姿と直結するが故に、必然的に多面的・多義的な様相を呈する。社会システムの欠陥が大量死をもたらしたと告発する立場からは、非業の死者は理不尽な犠牲として記憶され、既存の権力や制度への批判の象徴となるであろうし、逆に戦争による死者の場合は、見習うべき栄光として権力によって顕彰され、共同体の統合の象徴となるであろう。問題は、そのような多面的な死者の記憶がどのように生み出され、あるいは操作され、継承されていくか、という点になる。

公開シンポジウム

日時・9月19日（金）13:00～18:30

場所・法文二号館一番大教室

総合司会：池澤 優（東京大学准教授）

開 会・趣旨説明（13:00～13:25）

発 表（一人の発表は25分）

山岸智子（明治大学）「カルバラの悲劇」の多義性」（イスラーム・シリア派）

Marlene Albert-Llorca（トゥールーズ第二大学）

「戦没者の谷」から共同墓地へ：スペイン内戦（1936-1939年）の死者の記憶」

岩田重則（東京学芸大学）「地域社会のなかの「英霊」」（戦争死者の顕彰）

Yves Goudineau（フランス極東学院）

「さまよう心と体：ベトナム戦争死者の象徴的再構成と物理的再分配」

黒田裕子（阪神高齢者・障害者支援ネットワーク）

「阪神・淡路大震災に見る公的システムの欠陥と自助システムの構築」

Olivier de Bernon（フランス極東学院）

「政治的マニフェストから劣悪商業へ：

ブノンペンとその周域におけるクメール・ルージュの被害者の記憶の扱い」

コメント

Jean-Pierre Albert（フランス社会科学研究所）

深沢克己（東京大学）

総合討議（17:05～18:30）

レセプション（19:00～21:00）

この点について、本シンポジウムでは非業の死の記憶を表明する儀礼 追悼なり慰霊といった世俗的/宗教的な儀礼 に注目したい。追悼儀礼は現在の我々の価値感や主張を死者の記憶という形で表象する一つの戦略なのであり、その戦略がどのように働いているのかを明らかにすることが目的となる。テーマの副題とした「ポリティクス」とは、そのような意味での戦略を指すものであり、必ずしも「政治」を意味しない。

以上のような意図で、今回もフランス極東学院の全面的な協力の下、フランスと日本から下記のような専門家を招聘することになった。この機会に、惨禍に倒れた無言の死者たちが我々

の現在と未来について何を語っているか、耳を傾けることができたなら幸いである。多数のご参加を期待する次第である。

研究集会は二日間の日程からなる。一日目(9月19日(金))は公開シンポジウムを行い(同時通訳つき)、二日目(9月20日(土))は若手研究者の発表を中心に集中的な討議の場とする。予定している登壇者ならびに構成は以下の如くである(タイトルから内容が推定できない場合、内容を()内に注記した)。

ワークショップ

日時・9月20日(土)13:00~18:30

場所・法文一号館(予定)

総合司会:佐藤健二(東京大学教授)

基調発表(13:10~14:00)

Sebastien Tank-Storper(フランス国立科学研究センター)

「能動的記憶:記憶の政治的転換」(アルゼンチンにおけるユダヤ人の死)

末木文美士(東京大学)「日本における戦争の死者と宗教」

分科会発表(14:10~16:10 2分科会に分かれる。一人の発表は20分)

富澤かな(東京大学)「英領インドにおける死の記憶」(インドにおけるイギリス人の死)

藤崎衛(東京大学)「血の中傷事件 中世ユダヤ人迫害の記憶構築」

Gregoire Schlemmer(フランス開発研究所)

「死者のポリティクス:ヒマラヤ・クルン族における先祖, 邪悪な死者, 媒介者」

嶋内博愛(東京大学)「子どもの<死>はどう捉えられてきたか」

(ドイツ語圏の民間伝承における子ども(胎児・嬰兒・幼児)の死)

S. Mulot(ツールーズ大学)

「グアドループの文化政策における交易と奴隷制の記憶と表象」

Abigail Mira Crick(社会人類学センター)「砂漠の犠牲者:国境での若干の死者をめぐる道徳的・政治的考察」(アメリカ・メキシコ国境での死)

Eric Villagordo(モンペリエ大学)

「芸術のポリティクス:マンガにおける2001年9月11日の記憶とグランド・ゼロの記憶碑」

西村明(鹿児島大学法文学部准教授)

「記憶のパフォーマティヴィティ 犠牲的死によって開かれる未来」(原爆死者の追悼)

コメント(16:30~17:10)

Anne Bouchy(フランス極東学院教授)

大稔哲也(東京大学准教授)

総括討論(17:10~18:30)

目 次

— CONTENTS —

●巻頭エッセイ●

イスラームの死生学のために

大稔 哲也 2

魯迅の遺言状

藤井 省三 3

●イベント報告●

東アジアと西洋の文脈における遺伝子倫理・国際会議（香港バプティスト大学）

一ノ瀬正樹 4

第2回BESETO哲学会議（北京大学）

一ノ瀬正樹 5

生と死をめぐる映画上映会ドキュメンタリー映画「ひめゆり」上映会・監督講演会

高橋 都 6

ジェイムズ・チルドレス教授公開講演会「バイオエシックスの世俗化—神話か、現実か？」

島蘭 進 7

《医療・介護従事者のための死生学》—実績と企画—

清水 哲郎 8

日中国際研究会議「東アジアの死生学へ」

竹内 整一 10

ワークショップ「死別とグリーフに向き合う——他者へのケアとセルフケア」

山崎 浩司 11

東アジア人文学交流の出発——第1回PESETO人文学学術会議から——

下田 正弘 12

アレクセイ・リドフ博士講演会

伊藤 拓真 14

アカデミック・ライティングのワークショップに参加して

早川 正祐 15

死生学研究会報告

加藤 大基／福間 聡 16

●企画案内●

ロバート・ニーメヤー教授講演会「喪失の体験と意味の再構成——
レジリエンス（復元力）に関する最新動向」のお知らせ

山崎 浩司 17

国際シンポジウム「非業の死の記憶——追悼儀礼のポリティクス」のお知らせ

池澤 優 18



死生学 DALs ニュースレター No.20

平成20年7月18日発行

東京大学大学院 人文社会系研究科

グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」

代表者 島蘭 進

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号

Tel&Fax 03-5841-3736

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/>